

東京バッハ合唱団 月報

[第 647 号] 2016 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 647

May 2016

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 22 回「エキュメニカル功労賞」受賞の快挙！

小海 基 (団員、荻窪教会牧師)

去る 4 月 29 日 (「エキュメニズムの日」) 午後 1 時から、四谷にある聖イグナチオ教会の岐部ホールにおいて、J E A 日本エキュメニカル協会 (理事長・松山與志雄氏) 主催「エキュメニズムの日」の集會が開かれ、私たちの東京バッハ合唱団が第 22 回エキュメニカル功労賞を受賞しました。本当に大村恵美子先生おめでとうございます。キリスト教に関係のない人には「エキュメニカル」というギリシア語の「オイコス (家)」を語源とする言葉にあまりなじみがないかもしれません。「エコノミー (経済)」もこの言葉を語源とするのですが、「世界教会運動」とか「教会一致運動」とも訳されることの多い言葉です (本来はもう少し広い意味になります……)。

開會に先立って松山理事長から、「本来ならば創立 54 年という、世界のいろいろな“バッハ合唱団”の中でも最も伝統ある団体の一つである、というだけでも顕彰に値するけれども、長い年月を重ねて、文化的にも非キリスト教的な土壌の日本において、コツコツとバッハのカンタータを翻訳し、上演し続けるという地道な働きが、日本の宣教や靈性をどれだけ高めて来たことかということをつくづくと思わされる」と、今回の顕彰に至った経緯が語られ、カトリック、聖公会、日本基督教団の若者たちによる、素朴な合奏とリードによる、テゼ共同体の祈りと黙想 (45 分ほど) をもって會はスタートしました。東京バッハ合唱団員も含めて 70 名近く集まった参加者は、繰り返し歌われるテゼの賛美に声を合わせ、心を静めました。

続いて表彰がなされ、大村恵美子先生が「東京バッハ合唱団の半世紀、バッハの寛容さに導かれて」と題して講演をされました [当月報に次ページより収載] (同講演の全文は、「春秋」誌 No. 573、2015 年 11 月号掲載の大村健二氏「バッハ・カンタータの日本語演奏——バッハ受容のもう一つの断面」(転載) と共に、協会機関誌「エキュメニカル情報」No. 34、2016 年 4 月 29 日発行号に収録されています)。

講演にひきつづき、カンタータ第 192 番の冒頭合唱「ああ感謝せん 神に」と、同定旋律による 4 声体コーラル (BWV 252) を、われわれのコーラスが披露しました (ピアノ伴奏: 石川優歌さん)。

22 回を重ねてきた、これまでのエキュメニカル功労賞受賞団体と個人 (毎回 1 団体、1 個人と限らない) の内訳は、社会的な働きが 12 団体、聖書関係 7 人、神学者 4 人、音楽関係が 4 団体です。音楽関係で顕彰されたのは東京バッハ以前では、典礼聖歌の作曲家・高田三郎氏 (第 4 回)、第 26 回教会音楽祭実行委員会 (第 10 回、この時には私・小海や団員の松尾茂春氏も委員でした)、黙想と祈りの集い準備会 (第 19 回、今回のオープニングを務めたテゼのグループ) です。

賞状の文面には、54 年にわたって私たちの合唱団が「日本語訳によるバッハの教会カンタータ演奏をとおして、会衆の心が育てられて、なんら隔てなく『美しく神を讃え、命を喜び、互いに競い合って楽しむ』よう尽力」してきた功績が讃えられています。

— 第 113 回定期演奏会 ご案内 —

2016 年 5 月 28 日 (土)、午後 2 時開演
府中の森芸術劇場ウィーンホール

日常生活のバッハ—教会暦を辿って

- ・カンタータ第 148 番《み名の栄光を讃えよ》
- ・カンタータ第 40 番《地に來ませり 神のみ子》
- ・カンタータ第 16 番《主 ほめ歌わん》
- ・カンタータ第 192 番《ああ感謝せん 神に》

[アルト] 佐々木まり子

[テノール] 鏡 貴之

[バス] 山本悠尋

[オーケストラ] 東京カンタータ室内管弦楽団

[オルガン] 草間美也子

[指揮/オーボエ] 辻 功 (BWV16)

[指揮・訳詞] 大村恵美子 (BWV148、40、192)

- ・チケット: 前売り 3500 円 (全席自由 500 席)
- ・お申込み/お問合せ: 東京バッハ合唱団事務局
(下記のいずれかでお申し込みください。振替用紙同封にて、チケットを郵送いたします。後日、お近くの郵便局よりお振込みください)

●電話: 03-3290-5731 ●FAX: 03-3290-5732

●メール: office@bachchor-tokyo.jp

●HP お問合せ窓口: http://bachchor-tokyo.jp/

式典の後にもたれた懇親会では活発に質疑応答がなされましたが、最後にご自身も隠退牧師の一人として松山理事長が、「長年続けてこられたカンタータの翻訳と上演という活動が、いかに私たち牧師の説教と通じるものであるかを思い知らされた。元はヘブライ語、ギリシア語の原典から苦勞して日本語に翻訳し、解釈し、説教にしていくのと全く同じだ。私の知人の賛美歌学者であった青山学院の故・原恵氏が、『散々に苦勞して歌える形で賛美歌に作り変えても、[音節数の違いで]もとの歌詞の10分の1しか音符に乗らないという闘いなのだ』と言っていたのを思い出した。こうした働きが、日本の教派を超えた靈性に果たしてきた影響がどれほど大きかったかを思う。その割に光があてられることも、報われることも少なかったと思う」と語られ、結ばれたのがたいへん印象的でした。

振り返ってみれば、これまでも主宰者の大村恵美子先生の54年の働きが評価されたり、称えられたことは多くありましたが、今回のような具体的な顕彰を受ける（少なからぬ賞金までいただくような形で！）ということ、半世紀を過ぎる歴史の中でも初めてのことでないでしょうか。なかなか文化芸術に陽の目の当たることの少ない日本社会の風土の中で、日本エキュメニカル協会がこうして、単なる年功序列の名誉顕彰ではなく、深い理解と共感をもってこのように私たちの働きを評価して頂けたことはすばらしいことだと思います。

講演

東京バッハ合唱団の半世紀 バッハの寛容さに導かれて

大村 恵美子（東京バッハ合唱団主宰者）

日本が明治政府いらい急激な近代化をおし進めて、国際社会への仲間入りに成功したのは、文化革命としても異例なことでした。先進国との摩擦をたくみにかわしながら、音楽芸術の分野でも、基礎的な教育法をとり入れ、また西洋音楽の歴史から同時代の活動までが、多数の留学者たちによってつぶさに伝えられました。

この時代の先端を進んだ人びとの、その異質なものの包容力と同化力のたくましさには、ただただ驚くばかりで、それが早くも数十年後に覇権主義的な軍備拡張に方向をまげて、やがて先進諸国の全面戦争にあって2度も加担し、新興国としての全エネルギーを使い果たしてしまったのは、なんとも惜しまれます。

あげくに、徹底的な敗戦国の運命をたどって再出発できたのは、これも出直しの条件としては、むしろ幸いなことだったと言えましょう。何のバイアスもかぶせずに、即物的・科学的に、国の進路を計ろうという



■第22回「エキュメニカル功勞賞」授与式で、松山理事長（奥・右端）から紹介をうける主宰者（2016年4月29日、四谷・岐部ホール）

建前に生かされ、たとえば音楽の面でも、資本主義国と社会主義国との芸術創造の価値には差別なく、文明国と発展途上国とのそれも同様で、ロシアでも、アフリカでも、どんな国の音楽でも等しい好奇心が寄せられました。西側の諸都市でも同様に、私が留学していたわずかの期間でも、1960年前後のフランス・ストラズブール（独仏国境の国際都市）ではユダヤ、南米、東洋とあらゆる民俗音楽の舞踊や礼拝形式による音楽紹介が、毎週のように体験できました。

東京でも、頻度はそれほどでなくても、このような傾向は感じられました。私は、戦後すぐにキリスト教の環境になじんだのですが、礼拝でうたう世界中の讚美歌を知り、その後いくつかの機会にJ・S・バッハの教会カンタータをきくことがあって、その生き生きとした生の喜びの表現に、たちまち心を奪われてゆきました。カンタータの内容はまさに讚美歌と同じで、それが合唱・重唱・独唱・オーケストラ・オルガンと、あらゆる表現機能を集めたアンサンブルで、礼拝中の10分から30分ほどを満たすのですから、私には、こんなに理想的な神讚美はほかにあり得まいと思われました。バッハの時代のルター派教会では、長い牧師の説教と同じように、この音楽アンサンブルを聴くことによってどれだけ会衆の心が育てられたことか、と想像されます。

教会カンタータの音楽性の質の高さは相当なもので、バッハ自身による毎週の上演にあたっては、他教会や大学との協働によって支えられたものです。したがって、これを今日の日本にとり入れるとしたら、まず演奏能力のある音楽家を集めることが困難です。教会の音楽関係の会計支出では、オルガニストと聖歌隊維持のためにしか考えられていないくらいですから、経済的にまったく実現不可能です。

先のストラズブールでは、私自身も聖歌隊に参加していたサン・トマ教会をふくむ多くの教会や大学内での実際のバッハ演奏に立ち会ってみたりして、日本の教会の中では、経済面は言うに及ばず、空間的にも、時間的にも、すべての面で実現の余地はないと判断し、1962年に帰国後、バッハ合唱団の演奏を開始した時から、教会主催ではなく、プライベート合唱団の主催

として一貫させました。一般の楽壇のコンサートでも、少しずつバッハのカンタータ演奏もとり入れられて来ましたが、なにしろパイプオルガンの借入料・運搬料・調律料だけでも数十万円、プロ演奏家のオーケストラや独唱者たちにもそれぞれに必要な支出は、わずかな時間のために100万、200万円に達します。合唱団じたいの維持だけでも大変な努力が要ります。それでも多くの愛好家が集い、コーラスで声を合わせる者、後援会員やサポーターになって運営を支える方、毎回の公演を聴きに会場くださる聴衆の方々が、半世紀におよんでも絶えないのは、バッハ作品の卓抜した魅力の証しに違いありません。

キリスト教会の懐で育ちあがったバッハのカンタータは、幸いにも200曲ほどが現存します。しかし、当時の信徒の心を養った、いずれも珠玉のこれらの至宝が、わが国ではその故郷（教会）に迎えられずに、プライベートな奮闘のなかでもがいているという事情だけはお知らせしておきます。

*

2009年（創立47年目）8月、ドイツ・フライブルク大聖堂での日曜ミサでは、私たちの合唱団とフライブルク側の方々の、まれにみる創意の集結が成功した結果、これまでになかった西洋と東洋の音楽家の協働（中世の創建いらい、当地での東洋からのミサ客演は初めてとのこと）、プロテスタントとカトリックの協働（ミサの合唱曲からオルガン奏楽にいたるまでバッハ作品、それも二長調の関係調に統一された）が実現されて、これこそがエキュメニカルな世界の奇跡だ、と直後に多くの関係者の方々からの声があがりました。

J・S・バッハは、18世紀ライプツィヒのルター派教会の音楽監督ですが、イタリア、フランスなどカトリック圏の音楽を先進の芸術として尊敬し、謙虚に学んだし、祖国ザクセン選帝国の君主（兼ポーランド王）のために、自らの意志でミサ曲を献呈しました。バッハの心には国家主義はなく、あらゆる伝統芸術・新開拓の芸術を、独自の価値観で公平に選びとって、生命讃美の表現に、いささかの躊躇もなく生かしたのです。こういう態度は、ごく一級の芸術家、たとえばミケランジェロ、ゲーテ、モーツァルトなどにも顕著なもので、芸術の本質のただ中に生きる人間には、宗教や国や民族といったあれこれの後発的な差別は、目に入らないのです。また、自分の創作がどこの誰に勝るか、劣るかという比較も無縁です。

私には、大きな意味で、これこそがエキュメニカルの真の姿だと思われるのです。人類は、大きく、強く、攻撃的な人びとの国が栄え、それに劣る者たちが餌食になってゆくという歴史をくり返していますが、人間としての器量の大きな人たちが指導すれば、こういう陣取りばかりの殺伐さを脱して、誰もが人間の良質なものを等しく認め、意地の張り合いを生き甲斐とするのでなく、豪華ではなくても、いかに美しく神を讃え、

生命を喜ぶかを競い合って楽しむようになれるのではないのでしょうか。

神は人間を信じるに足る相棒とされ、友とされる。それに報いるのには、神の子たちの仲間同士の信じ合いしかないでしょう。こういう、ごく単純な性善説をキリスト教に見出してから、私はバッハの音楽一筋に半世紀をすごしてきました。バッハ芸術の大らかさと深さ、総合と普遍とが、その性善説にまったくふさわしい存在だったからにはほかなりません。それは、決してバッハ以外のものは受け入れない、という頑なさからではありません。今にいたるまで、バッハが日本では少数派にとどまっている現状だから、ということもあるのかも知れません。

そのようなバッハの寛容さを、この異教の地の人びとの心の中にお伝えするうえで、私どもの合唱団の活動がすこしでも役立っているならば本当に幸せです。

（日本エキュメニカル協会主催「エキュメニズムの日」2016/04/29での講演原稿を転載しました）

お・た・よ・り

阪根 隆司（後援会員）

1992年頃の、大村先生がインタビューを受けられたときのDVD、とても懐しく、何度も観賞させていただきました。先生の若かりし頃の問いかけ（将来どのような職業について何をしたいのか）に、やはりしっかりした人は具体的な職業を希望し、具体的な目標を目ざされるのだということを、大切な事として改めて教わりました。

創立30周年記念演奏会〔《ヨハネ受難曲》1992年4月18日、新宿文化センター〕の場面では、T川戸さん、A本田さん、S荒井さん等と共に私も写っており、私はこの頃、マタイよりも劇的な構成の変化に富んだヨハネ（受難曲）を好んでいて、あの時皆さんと一緒に歌えてよかったと思いました。

バッハ紹介のところでは、緑豊かなアイゼナハの光景を目にし、私がドイツのロマンチック街道へサイクリングの旅をした元気な頃のことを思い出しました。

そして先生は、いちばん大事なことは神から与えられた生の喜び、バッハの音楽を通じて神に感謝し、それをどんな形にして捧げるか、与えられた時間をどう生かすかを問い続けてこられたのでしょうか。

キリストの存在を頼りに 自分自身を 人間の道から外れないよう キリストの教えによって 美しく慈悲深く 生きてゆこう

科学や哲学ではなく 具体的な人間の形をした イエス

私は先生からもう一度 神を教えられている（東京バッハ合唱団に入団して）

羽ばたく若いアーティストら

大村 恵美子

2016年4月5日、満開の桜に彩られた上野の山に、約1000名の芸術青年が勢揃いした。東京芸術大学の入学式が、音楽学部の奏楽堂で行なわれたのである。

私自身の入学式も卒業式も、はるかの彼方に忘れ去っていたが、この春、北大を卒業された小海祈さん(テノール団員・基氏のご子息)が、横浜にある大学院映像研究科に進学されたと伺い、今まで音楽学部と美術学部しか知らなかったの、この機会に、母校の近況に触れてみようという気になったのだった。数年前の荻窪教会クリスマス会で、アンサンブルの中でトランペットを吹いた祈さんをお見かけしただけで、その後のような道を進んでゆかれたのかも知らずにいたのだが、大学を終えたあとに進まれたところが、私にとっては初耳のコースだったので、ぜひとも遅ればせながら芸大の現状も認識しなおしたいと思った。

そのうえ、もうひとり、昨2015年8月の南相馬公演の前に、石川優歌さんという芸大オルガン科4年生を、合唱団の伴奏者に迎えた事実も重なっていた。合唱団創立以来、一筋にオルガンの協演をおねがいして来た草間美也子様が、体調不良で東北公演をためらわれていたので、タイミングのよい石川様との出遇いに、感謝したものだ。優歌さんの父上、正信様(教文館勤務、松沢教会聖歌隊指揮者)とは古くからの識合いだったが、そのご息女のごことは昨年ふとしたきっかけで知ることになったのである。そしてそのご当人が、この春オルガン科の大学院に進学、というので、小海祈、石川優歌ご両人が、専門は違うものの、同期生として入学式に臨むこととなったわけなのだ。

優歌さんの奏楽堂での公演には、昨年いちど聴きに出かけた。彼女にとって、この日も同じ校舎での4年間の延長で、ご両親もいらっしゃらず、式後もとりまぎれてお会いできなかったが、小海一家(祈さん+ご両親)とはお目にかかれ、これから横浜校舎に集合予定の祈さんとは桜吹雪の公園内でお別れして、大人たちは蔭祝いの場に向かった。

1955年度入学の私には、まだ戦後の「浮浪者」たちのたむろしていたこの界隈を、1年間病欠して病み上がりで入学した、体の脆弱な時期の、きつい思い出ばかりに満ちた通学路を、いま闊歩する新入生たちの群がたのもしく映った。しかし、いまの地球上には、人間の手に負えない大きな不安が漂い、最高の「晴れの日」にちがいないこのシーンにも、幾重にも重なった息苦しさを感じている。どうか、叡智の支配する、より賢明な前途が、彼らの未来に拓がりますようにと、心から祈る、印象深い一日となった。

入学式は、奏楽(箏・三絃・尺八・鼓による《春の海》《松竹梅》)、入学許可式、学長(澤一樹氏)式辞、

役員等紹介、で約40分。簡要な式次第でまことに結構。学長(若き日の澤氏は、1970年代の私たちの定期演奏会で、堤俊作氏指揮の下、何度かコンサートマスターを務めてくださった)が、話す前に、いきなりヴァイオリンをとり出してバッハの曲を独奏し始めたのは、愉快的サプライズだった。

(付き添い・見物者たちは、他の3カ所のホールのテレビ中継で状況を見守った。)

夏の行事予定と次回公演予告

◆創立54周年特別演奏会と記念懇親会

7月2日(土)14時、会場=荻窪教会

・演奏会(器楽アンサンブルとオルガンと合唱)

Vn 中川典子、VC 木島洋一郎、Org 石川優歌

カンタータ《主イエス眠り いかによすべき》BWV 81

カンタータ《み名の栄光を讃えよ》BWV 148

アリア《かたえに主いませば》BWV 508…*

カンタータ《目覚めよと呼ばわる 物見の声》BWV 140

<入場無料>

・創立記念懇親会(公演後、15時30分~17時30分)

内容:ゲストのスピーチ、歓談など(軽食つき)

<要予約>事務局あて申込み、参加費1000円。

◆長野県野尻湖、ワークショップとコンサート

8月4日(木)~7日(日)合宿

8月5日(金)、ワークショップ

会場=野尻湖公民館、18時30分より

(長野県信濃町のみなさんと)

(素材:コラール《イエス わが喜び》BWV 147/10)

8月6日(土)16時、第41回野尻湖コンサート

会場=野尻湖国際村・集会場(神山教会)

Br 山本悠尋、Pf 石川優歌、東京バッハ合唱団

BWV 81、BWV 148、BWV 140(上記7/2曲目)

アリア《気晴らしにタバコを詰め》BWV 515…**

*,**…いずれも『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳』より(日本語演奏、初演)

◆第114回定期演奏会 予告

2016年12月3日(土)、午後2時開演

会場=府中の森芸術劇場ウィーンホール

カンタータ《かたえに 主いませずば》BWV 14

アリアとコラール『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳』より10曲、BWV 508-518

カンタータ《われ 足れり》BWV 82

カンタータ《目覚めよと呼ばわる 物見の声》BWV 140

Sop 光野孝子、Ten 鏡 貴之、Bar 山本悠尋

Orch 東京カンタータ室内管弦楽団、Org 草間美也子

Cond 大村恵美子

— 団員募集 —

上記公演の新規出演団員を募集します。

第113回定演(5/28)終了後に、練習が開始されます。

○月曜練習……18:30-20:30、目白聖公会

○土曜練習……15:30-17:30、荻窪教会

問合せ=東京バッハ合唱団事務局(本紙冒頭参照)